

サント＝ブーヴの後世

中 野 知 律

1904年、文壇は近代批評の創始者の生誕百周年を記念することを忘れてはいなかった。生誕地のブーローニュ・シュル・メールとシャトーブリアンを講じた地リエージュでは12月18日に、ポール・ロワイヤルについて公演したローザンヌでは批評家の誕生日の23日に合わせて、それぞれ記念式典が催され、サント＝ブーヴの円形浮彫肖像および記念プレートがゆかりの場を飾ったのである。すでに1898年6月、パリのリュクサンブール公園の一隅に第三共和政下の御用彫刻家ドニ・ピュエシュの手になる像が据えられた際には、芸術アカデミー終身幹事ギュスターヴ・ラルメ、企画委員長フランソワ・コペ、アカデミー・フランセーズ終身幹事ガストン・ボワシエが祝辞を述べている。ボードレール像の製作者でもあるジョゼ・ド・シャルモワによってモンパルナス墓地に刻まれたサント＝ブーヴの胸像の除幕式は、コレージュ・ド・フランスの考古学者で「ジュルナル・デ・デバ」紙の編集主幹もつとめたガストン・デシャンの講演と、コペの後を襲ってアカデミー・フランセーズ入りすることになる詩人劇作家ジャン・エカールの詩の朗読とともに、1903年5月にとり行われた。

サント＝ブーヴ——人と作品

著書『サント＝ブーヴ研究の半世紀—1904～1954年—』（1957）でジャン・ボヌロは、この生誕百周年をサント＝ブーヴ研究の本格的な出発点と捉えている⁽¹⁾。1904年には、前年ソルボンヌに受理された同批評家についての初の博士論文、ギュスターヴ・ミショーの『『月曜閑談』以前のサント＝ブーヴ』が刊行されて、後の研究の指標となったほか、「ジュルナル・デ・デバ」紙が企画編集した『サント＝ブーヴ記念集』の巻末に、「その名に値する最初の書誌」が付されたからである⁽²⁾。

世の関心はサント＝ブーヴの作品と人生の両面に向けられていた。彼の晩年の秘

書を務め、書類の相続管理人となったジュール・トルーバは、批評家の死の直後から原稿、メモ、書簡等の刊行を始めるとともに、主人と過ごした日々の回想を折に触れて公表していたが（彼はゲーテの秘書エッカーマンに自らをなぞらえ、主人の「こだま écho」「生きた書物 livre vivant」さらには「サント＝ブーヴ商人 Marchand de Sainte-Beuve」を任じていた）、1910年には、それらをまとめた『サント＝ブーヴの食堂』をメルキュール・ド・フランスから出版している⁽³⁾。ベルギーの蒐集家スプールベルヒ・ド・ロヴェニユールが彼から譲り受けたサント＝ブーヴ資料は1907年にフランス学士院に遺贈され、1914年以降閲覧可能となるだろう。

1904年には、サント＝ブーヴの人と作品についての証言と研究、伝記的・書誌学的文献がこうして利用可能な形で現れる一方で、『月曜閑談』第七版、『新月曜閑談』第八版、『ポール・ロワイヤル』第六版をはじめとする著作の校訂作業も着実に進んでいた。サント＝ブーヴをその全著作、全貌において読み直す条件が整っていくなかで、ブルーストとその同時代人は、19世紀を征したサント＝ブーヴの批評を批評するという魅力的な企図に挑むことが可能となったのである。

ブルーストが生前、サント＝ブーヴについて立場表明を行う機会は、二度あったと言えよう。まず、1904年の生誕百年に際しての文学界の反応に触発されるかたちで、『サント＝ブーヴに逆らって』が構想されたということ。そして、批評家の没後50年にあたる1919年には、後で見るように、戦勝気運に乗ってサント＝ブーヴが特殊な文脈で話題にされる時期にあって、ブルーストは、サント＝ブーヴ批判が随所にみられる文章「読書の日々」（「読書について」の題で1905年に雑誌掲載され、1906年刊の『胡麻と百合』の訳者序文となる）とサント＝ブーヴの模作（1908年3月「フィガロ」紙に掲載）の再録を含む『模作と雑録』等を上梓したのだった⁽⁴⁾。最初の構想はブルーストの意志によって出版されることはなかったし、二度目の機会に発表された一連の評論はサント＝ブーヴ批判と銘打って世に出たものではなかったが、しかしそれらは、ブルースト研究の側でとかく見落とされがちであった面すなわち、サント＝ブーヴに関する同時代の議論に敏感に呼応していたブルーストのエクリチュールについて、重要な手がかりを与えてくれるものである。しかも、この二つの契機に両作家の因縁が収束するわけではない。批評家の生誕150周年に当たる1954年は、ベルナール・ド・ファロワによって発見されたカイエに拠る校訂版『サント＝ブーヴに逆らって』が世に出た年でもあったのだ。

本稿では、サント＝ブーヴの後世を分節する周年祭を機に活性化された文壇の議

論に照らして、プルーストの視座がいかなる独自性をもっていたのか、また、どのような論点にプルーストが関心を示し、自らの小説美学の錬成に結びつけることになるのかを考察してみよう。

サント＝ブーヴ批評を批評する——生誕百周年の擁護と反駁

1904年前後のサント＝ブーヴをめぐる批評言説に、プルーストは無関心ではなかった。当時ラスキン翻訳関連の仕事の仕上げにかかっていたプルーストは、先述の「読書について」のなかで、ラスキンの読書論をサント＝ブーヴの読書態度に重ね合わせて批判している。「読書の役割が私たちの精神生活を目覚めさせることにある」のを理解せず、「他者の手になる真理」を「外から力づくで私たちに受け入れさせる」ことが読書の効用であると考えるラスキン、「未完の書簡や回想録」など創作の傍証でしかない書物あるいは「自分自身の外にある真理」が宿る史資料を「遠くまで出かけて」読もうとするサント＝ブーヴ、いずれも内発的な精神活動としての読書の外に留まった二作家を比較するためにプルーストが註で言及しているのが、1904年にメルキュール・ド・フランスから刊行されたばかりのレオン・セシェの著作『サント＝ブーヴ I. その精神と思想 II. 生活習慣』であった⁽⁵⁾。ポール・ロワイヤル研究やロマン派の研究で定評のあったセシェは、未刊行資料や書簡を駆使した多くのサント＝ブーヴ論を残しており、サント＝ブーヴ評の第一人者のうちに数えられていた歴史家である。

では当時、サント＝ブーヴについての、公式のとは言わないまでも、考慮に値するとみなされていた見解はどのようなものであったのか。サント＝ブーヴ研究者は、それを前述の『記念集』のうちに認めている。ブリュヌチエール、コペ、セシェ、ジュール・ルメートル、エミール・ファゲ、リュドヴィック・アレヴィ、ギュスターヴ・ランソン、アンドレ・ショーム⁽⁶⁾など、学士院会員、著名大学人、ジャーナリズムの大御所を執筆陣に揃えたこの記念集は、文学界の正統的見解の表明の場とみなされてきたのである。

興味深いことに、この記念集の責任監修者であったブリュヌチエールの巻頭論文（百年祭で代読されたテキスト）は、サント＝ブーヴに対する有り得べき否定的判断を想定し、それに反駁するものとなっている——いみじくも、サント＝ブーヴの方法に“逆らって”、批評家その人を擁護することによって。その冒頭を讀んでみよう。

「皆様

今日ここに我々が集い、最初の百周年を寿いでおります卓越した人物に対して、きわめて公正を欠いた目を向けることはたやすいでしょうし、そのためには、その人物が同時代人に対してあんなにも思いのままに行使していた操作方を、その人自身に適用しさえすればよいでしょう。そうです、まったくのところ、もし彼の私生活 *vie privée* の状況や身の上話に、彼の作品 *œuvre* の意義を求めようとするならば、[...] その綿密な探索、ぶしつけなまでに踏み込んだ、いささか不実な調査探求が、彼の才能 *talent* の性格や本性についても、その発達 *développement* の形成過程 *formation* や起源 *origines* についても、まったく光を当てることはないことに驚かれるかもしれません。[...] サント＝ブーヴがいかなるやり方で生きたにせよ、彼の作品の歴史的で文学的な価値や重要性をなすものは、[...] 彼の人生から引き離すことができるものなのです。

多くの人たちにとって、サント＝ブーヴの偉大なる独創性とは、批評を無味乾燥な作品の分析から生き生きとした人間の伝記 *biographie* へと変容させたことにあるのでしょうか。[...] その種の情報〔伝記的な情報〕への興味を私は否定はいたしません、サント＝ブーヴはあまりにも慎重だったので、もし人がそれを濫用したら批評の対象そのものが消滅するであろうということを、迅速に察知できなかったのです。しかし、大作家たちに我々が興味を覚えるのは、その作品に関してのみなのであります。』⁽⁷⁾

ブリュヌチエールの言葉は、サント＝ブーヴへの異議申し立てが当時めずらしくはなかったことを示唆しているのだが、実際それは、批評家の最後の秘書トルーバが1898年に講演で憂えていた状況——「サント＝ブーヴは死後20年来、研究の対象であり続けていますが、人々は彼に彼自身の方法を適用しているつもりで、しばしばサント＝ブーヴを痛めつけてきたのです」⁽⁸⁾——とも呼応するものだった。1895年にはすでにランソンが、後の規範となるような否定的判定を下している。「サント＝ブーヴは、伝記を批評のほぼすべてとするに至った」わけだが、「もし、サント＝ブーヴの例にならって、批評を彼が閉じこもった研究スタイルに還元すると主張するならば、サント＝ブーヴは方法をゆゆしく誤ったことになったろう。というのも、作品を説明するために伝記を使う代わりに、彼は伝記を構成するために

作品を用いたからである。[...] 彼の研究においては [...] 作品は人間に従属している。しかし、まさにその逆こそが正しいのだ。」⁽⁹⁾

ブリュヌチエールの演説とは言えば、その批判の矛先が最終的に向けられるのは、サント＝ブーヴよりもむしろ、その弟子世代すなわちテーヌやルナンによる師匠の方法の「濫用」に対してである。サント＝ブーヴは「文学批評の固有の対象を忘れてはいなかった」のであって、「人間について知られていることやその私生活」は「作品をより正確に知ること」に役立てるべきことを承知していたし、だからこそ「テーヌやルナンに与して文学作品の中に人種の特徴の証言や歴史的資料のみをみることには同意しなかったのだ」と述べながら、ブリュヌチエールはテーヌを批判することによってサント＝ブーヴを擁護しようするのだ⁽¹⁰⁾。(とはいえ、サント＝ブーヴのみならずテーヌの後継者を任じていたブリュヌチエール⁽¹¹⁾としては内心忸怩たる思いに駆られなくもなかったであろうが。)

“人と作品の批評家サント＝ブーヴ” 像が緩やかに、しかしその行き過ぎの元をたどれば必然的に結びつけられることになる“歴史家サント＝ブーヴ” 像は、実のところ、彼の評価をめぐるもう一つの論点であった。サント＝ブーヴをカーライルと並ぶ偉大な「歴史家」と呼び、「精神史 *histoire morale* の中に博物誌 *histoire naturelle* の手法を導入した」「創始者」とみなしてテーヌが賞賛した師の方法⁽¹²⁾は、文学に歴史主義を導入する旗振り役であったランソンによっていみじくもはねつけられている。「私は、彼がまれに見るモラリスト歴史家の才能を発揮してくれていたらと思うのだが、実際には、そうした精神の解剖の資料を形成している間、彼は文学批評の仕事を放棄していたのである。」⁽¹³⁾1895年のこのランソンの非難は、アンドレ・ボーニエにも分かちもたれることになるだろう。ボーニエは、『サント＝ブーヴに逆らって』を執筆していた時期のプルーストが自らの「文学研究」のことを打ち明けていた相手であるが⁽¹⁴⁾、1913年に次のように語ることになる。「小説は、テーヌやサント＝ブーヴやその弟子たちのような歴史学者および心理学者によって支配されてきた——しかもみごとに。彼らは文学を歴史学と心理学に従属するものとして扱い、文学は歴史学や心理学から資料や証言を借り受けてきたのである。それは文学の概念そのものを変質させ歪めることにほかならないのに。」⁽¹⁵⁾もっとも、サント＝ブーヴの「歴史的」方法への批判は、すでに半世紀前にフローベールによってなされてもいる——「ラ・アルプの時代には、批評家は文法家であった。サント＝ブーヴとテーヌの時代には歴史家だった。芸術家になるのはいつのことだろう？」⁽¹⁶⁾

『サント＝ブーヴに逆らって』は独創的か

伝記的方法の問題点，歴史的方法への批判。ここで確認しておきたいのは，百周年当時すでにネガティブな裁定が定着しつつあったサント＝ブーヴの方法（あるいはサント＝ブーヴ的と解釈されていた方法）の両輪をなすこの二特徴に対して，まさしくブルーストも反駁の筆を採ったということである。1908年晩秋，「サント＝ブーヴの方法に逆らって，という主題」で書き始めた「評論」のなかで，批判の足がかりとしてブルーストが言及しているのは，「サント＝ブーヴの方法に関する定義と讃辞」の確立者テーヌとその賛同者ブルジュの言葉だった⁽¹⁷⁾。すなわち1907年にブルジュが「フィガロ」紙に寄せたスプールベルヒ・ド・ロヴェニユールの追悼記事と，1869年にテーヌが書いたサント＝ブーヴ追悼記事である。

ベルギーの蒐集家が崇拝していたサント＝ブーヴの方法，「作品を理解する」ために「作家の伝記，その遺伝的性格，家族，友人，時代，仕事の過程に関するどれほど綿密であってもよいほどの探究，実証された資料に基づく探究」を遂行する方法は「あまりに素晴らしすぎて」，この「文学史家 *historien littéraire*」は弟子をもちえなかったのだ，とブルジュは嘆慨していた⁽¹⁸⁾。一方，テーヌによれば，「サント＝ブーヴ氏は人間を知るためにはどのような態度をとるべきかを示して見せた。すなわち個人を次々に形成していく一連の環境を観察することである。[...] この方法こそ，後世に託すべき自らの主要な称号だとサント＝ブーヴは考えていたのである」⁽¹⁹⁾。

“人と作品”の方法に対する1907年のブルジュののどかな礼賛は，1904年にブリュヌチエールが要約した当時の批判的見解——作家の「私生活」についての「綿密な探索」は「才能の本性」にも「作品の意義」にも「まったく光を当てることはない」——を覆すものではなかったし，また，テーヌが称揚した「人間を知るため」の資料調査方法は，「作品を人間に従属させる」目的の転倒した方法であるとして，ランソンに戒められていたことは，すでに見たとおりである。ということは，ブルジュとテーヌに反駁することから展開されようとしていたブルーストのサント＝ブーヴ批判は，すでに反駁されている判断への反駁という些か安易な反抗と同時代人の目に映る可能性があったわけである。

ちなみに，当時指摘されていたサント＝ブーヴの三つ目の欠点は，「意地の悪さ」「嫉妬」「妬み」である。「詩人および小説家としての彼の失敗は，とげとげしい感

情と、偉大な天才のうちに卑小な人間を見ようとする無意識の欲望を残した」と、
文学者協会編『大百科事典——科学・文学・芸術 詳説目録』（1886-1902）の中
で、ランソンは容赦なく言い放っていた⁽²⁰⁾。

妬み深いサント＝ブーヴ、歴史家サント＝ブーヴ、伝記的方法の批評家——20
世紀初頭のこうした批判によって彼の賛美者が一掃されたわけでは決してないのだ
が、しかし状況は、批評家の擁護のために筆を採らねばなるまいとジュール・ルメ
ートルに考えさせるほどではあったのだ。「サント＝ブーヴがあまりに悪く言われ
ると、私は怒りを感じる。彼を擁護し、少なくともその“罪”を釈明したいと思う
のである」と、1913年の著作『サント＝ブーヴの罪』のなかでルメートルは述べ
ている。「第二帝政下で執筆した批評家（歴史家であれ哲学者であれ）の中で、今
日、依然として最も読まれているのはサント＝ブーヴであると考えられよう」。「仮
説と皮肉」で埋め尽くされたルナンの書が、時に期待はずれに思えたり、テーヌが
「その思想と文体の硬さによって、かなり読みにくくなっている」のに比べると、
「サント＝ブーヴは彼らほど野心的でも体系的でもなかったので、過ちに陥ること
がより少なかった」⁽²¹⁾——誉めているのか、貶しているのか、奇妙な言ではある。

かくして百周年を機に高まった近代批評の始祖に対する裁定の議論の残響のなか
で、ブルーストは結局、自らも着手しかけていたサント＝ブーヴへの理論的・方法
論的糾弾を公表することを控えたのだった。サント＝ブーヴを批判すること自体が
決して珍しくはなくなっていた時代にあって、ブルーストのこの決断をどれほど惜
しむべきかはわからない。確かに、サント＝ブーヴの伝記的・歴史的方法の「濫
用」を咎めるブリュヌチエール（サント＝ブーヴはテーヌやルナンほど「文学作品
の中に人種の特徴の証言や歴史的資料のみをみることはしなかった」）や、その方
向性の誤りを戒めるランソン（サント＝ブーヴは「作品を説明するために伝記を使
う代わりに、彼は伝記を構成するために作品を用いた」が「まさにその逆こそが正
しいのだ」）に比べて、ブルーストの見解は、生と作品を質的次元の異なるものと
見、その微妙な相関関係を根底から問い直そうとしていた点で遥かにラディカルで
はあった。しかしその意義は、サント＝ブーヴ評価の是か非かのみを対峙的に論じ
る時代の風潮の中で、適切に理解されずに終わった可能性も優にあり得たかと思わ
れる。

いずれにしても重要なのは、今日まで長らく生き延びてきた神話の呪縛を、ブル
ースト研究者が裁ち切ることである。『サント＝ブーヴに逆らって』を未刊に留め
たブルーストの意図を、この大批評家への批判が当時の文壇を驚かせ憤慨させるの

を恐れてのことであったとみる言説は実際、今日に至るまではっきりと否定されたことはない⁽²²⁾。それはしかし、残念ながら、プルースト研究者が信じるほど“挑発的”な文学的事件にはなりえなかっただろう。当時サント＝ブーヴ批判の書とみなされたものの一つ、ジョルジュ・グラップの『サント＝ブーヴの庭で』(1908年刊；最終章は1905年1月1日の「半月手帳」に掲載)は1910年に批評賞を取っているし、アルベール・ソレルは1904-05年に「青色評論」に連載したサント＝ブーヴ論で、批評家が大詩人たちを“自分と同じ並のサイズに縮めてしまった”ことを批判していた⁽²³⁾(政治学院でソレルの講義を聴講したプルーストは、1905年の「読書について」の中で、彼の“サント＝ブーヴ的な”バルザックの読み方を指摘しているが⁽²⁴⁾)。1908年末のプルーストのテキストは、世にサント＝ブーヴ反論の声が既に充分にあがっている中で着手されたものであり、そのインパクトは疑わしいと言わざるを得ないのである。

没後50周年のサント＝ブーヴ

1919年、第一次大戦を弱々しい勝利の下に終えたフランスにおいて、サント＝ブーヴは新たな脚光を浴びることになる。没後50周年のこの年にサント＝ブーヴに与えられたのは、フランス的知性の守護神としての顔だった。そうした動きに逆らって、プルーストも自分なりのやり方で議論に加わることになる。

1919年11月10日付の書簡でプルーストはポール・スーデーに宛てて告げている。「友人のダニエル・アレヴィがサント＝ブーヴを最も確かな精神の導き手として賞賛しているのを見て、僕は残念に思いました。知性党のあの愚かなマニフェストに署名したことを非難する手紙で、僕はすでに彼を打ちのめしたのですが、そうでなければ、新聞への寄稿で彼に返答してもよかったのです。」⁽²⁵⁾議論を再燃させたのは1919年10月に「パリ評論」に掲載されたヴァンデレムの論考だった。「歴史家サント＝ブーヴ」は「同時代文学」に言及することが相対的に少なく「批評において失敗した」と述べるヴァンデレムに対して、サント＝ブーヴ擁護の筆を採った評者のなかには、ダニエル・アレヴィ、ルネ・ボワレーヴ、ジャック・ブーランジェなどプルーストの知己が何人もいた⁽²⁶⁾。1919年の「ジュルナル・デ・デバ」紙および1920年の「フランスのミネルヴァ」誌に掲載された論考で、ダニエル・アレヴィはサント＝ブーヴのうちに「不屈の理性」と「趣味の正しさ」を見ている⁽²⁷⁾。フランス的知性と古典的趣味の体現者サント＝ブーヴの擁護がこうして聖

者頌徳の趣を呈しつつあることに対して、プルーストは、それがフランス「人種」の「勝利から生まれた覇権」を文化において唱えようとする「知性党」と同種の主張であることを察して、厳しく批判したのだった⁽²⁸⁾。アレヴィへの非難は、プルーストが1920年1月の*NRF*に発表した評論「フローベールの“文体”について」の中でも改めて表明されている⁽²⁹⁾。

一方、『模作と雑録』（1919）に再録された二つのテキスト、サント＝ブーヴの模作と「読書の日々」に加え、ジャック＝エミール・ブランシュの著作『画家の言葉』（1919）への「序文」によっても、サント＝ブーヴに逆らうプルーストの立場は批評家の没後50周年にはいっそう公認のものとなった⁽³⁰⁾。J.-E. ブランシュの書評を担当したポール・スーデーは「ル・タン」紙で、「序文」の著者がサント＝ブーヴの“敵対者”であることを紹介し、プルーストは彼に手紙でその指摘について謝意を述べている⁽³¹⁾。

ジャック・リヴィエールが*NRF*誌に「サント＝ブーヴについての小論」を書くよう、1920年初め繰り返し熱心に彼に頼んできたのも、サント＝ブーヴに対するプルーストの関心を知っての上のことだった。プルーストはこの計画に心惹かれはしたものの、「今、サント＝ブーヴをめぐる論争 dispute に入る」余裕はないとしてこの話を断っている。ただし、「このエチュード」の代わりとして、「フローベールについて前にしたように」ボードレールやバルザックについての論考を著すことは吝かではない旨も伝えている⁽³²⁾。実際、1921年6月の*NRF*のためにプルーストは書簡体の評論「ボードレールについて」をリヴィエールに送っているし、それを1909年（『サント＝ブーヴに逆らって』を準備していた時期）のカイエに綴られたボードレール読解をめぐるサント＝ブーヴ批判の満を持しての展開と見ることも無理ではない。もっともプルーストがそれを示唆することではなく、むしろこの評論に付けた原注では、先に挙げたヴァンデレムの論考「ボードレールとサント＝ブーヴ」（1914年2-3月号「現代」誌掲載）に言及して、詩人に対する批評家の「方法 procédés」を問題にする視点がそこに「先取りされている」ことをわざわざ告げている⁽³³⁾。また、1920年1月の*NRF*に掲載されたフローベールの文体についての論考はチボーデに反駁するかたちを採っているのだが、チボーデはまさしく自他共に認める“博学な創造的批評家”サント＝ブーヴの後継者であったのだ⁽³⁴⁾。

つまりこの時期、プルーストが問題意識として変わらず持ち続けていたサント＝ブーヴの方法批判は、“理論的な評論”のかたちではなく「“実践的な”文学批評 critique littéraire “en action”」⁽³⁵⁾として発表される意志が明瞭に表明されていたこ

とになる。ところで同様の判断は、1908 年末から書き進められていたサント＝ブーヴ反論の行く末が勘案される際にも働いたのではなかろうか。作者自身が口にしていた「サント＝ブーヴに逆らって」という題が1909 年いっばいで書簡に現れなくなり、1910 年のカイエ群のなかでゆっくりと、しかし不可逆的に、「論考 article」あるいは「研究 étude」⁽³⁶⁾ 構想が『失われた時を求めて』という小説構想へと変容していった過程は、クロディーヌ・ケマール、ベルナール・ブラン、吉川一義らの緻密な検証により詳細に明らかにされた通りである。過渡期において「『サント＝ブーヴに逆らって——ある朝の思い出』と題された正真正銘の小説」と呼ばれていたテキストの変貌はしかし、これまで指摘されてきたような「評論体」テキストと「物語体」テキストとの量的なバランスの変化（後者の前者に対する膨大な増殖）の結果であるばかりではなく、何らかの美学的判断をふまえた意図的な脱構築であったと考えることはできないか。「“実践的” 批評」への傾斜は今の場合、理論的評論を個別作家評論に応用することではなく、実践的すなわち“小説化された” 批評行為に行き着いたのであって、それを単なる偶然や作家の気質によるものと見るのではなく、サント＝ブーヴ批判を根幹から果たすための必然的な方法とプルーストが自覚したがゆえではなかったか、と考えてみたいのだ。

サント＝ブーヴ批判を評論ではなく小説として書く意味への目覚め——この美学的クリティカル・ポイントをプルーストがいかに経験しえたか、考察を続ける前に、一時立ち止まって、小説家と批評家の因縁の最後の節目、サント＝ブーヴ生誕 150 周年におけるプルーストの読まれ方についても簡単に確認しておきたい。

1954 年、ベルナール・ド・ファロワに見出されたカイエ群が『サント＝ブーヴに逆らって』として発表されたことの意義は、プルースト研究者とサント＝ブーヴ研究者とでは著しく異なる形で理解されてきた。プルースト研究側に見られたのは、過去の驚くべき偉業がついに明らかにされたという反応である。1961 年の論考「“サント＝ブーヴに逆らって” の批評的研究」において碩学アンリ・ボネは次のように語っている。「マルセル・プルーストの立場は、サント＝ブーヴの 150 周年を記念したばかりであった批評界にいささか驚きを引き起こした。人々はプルーストの主張の厳格さの中に、我々の最も偉大な批評家の一人と皆が挙ってみなしている人物に対する不当な仕打ちをいくばくか見出したのである。」「フランスの繊細な精神の持ち主達のうちに多かったサント＝ブーヴの信奉者は、プルーストによる批判に驚いた。」⁽³⁷⁾ 我々がすでに見たような、近代批評の始祖への賛否両論で沸いたプルーストと同時代の文壇の動きがなぜか忘れ去られた後の（その忘却は今日まで続

いてきたわけだが)、また、プルーストが新批評の始祖に祭り上げられる前の、興味深い反応の観察である。

一方、サント＝ブーヴ研究の側では、『サント＝ブーヴに逆らって』の登場は「多くの批判者の中にマルセル・プルーストが加わった」ことに過ぎないという理解であったことを、ボヌロは伝えている。さらに、1957年刊のサント＝ブーヴ研究書誌に彼が付した註には、「プルーストは1906年から、ラスキンの『胡麻と百合』の翻訳〔序文〕において、サント＝ブーヴへの攻撃を始めていて、その“盲目ぶり”は“洞察力の自負と対照をなしている”等々と述べている」とある⁽³⁸⁾。

当時の文学界の動きに照らしてプルーストのテキストを再検証する意味は、作家への思い入れによる読者・研究者の記憶の意志的陥没をこうして些かなりとも修復してみることにあると言えるだろう。

生成批評の元祖サント＝ブーヴ？

同時代の天才を見誤ったこと、伝記的方法の問題点、歴史的視点の濫用——同時代のサント＝ブーヴ批判が要約されうるこの三点に還元されないプルーストの反駁の独自性は、では、あったのか。それを考えるうえで目を留めてみたいのは、後世の批判者たちから誹謗されることのなかったサント＝ブーヴの美点、作品成立起源と形成過程の批評家としての相貌についてである。

1904年12月半ばのリエージュでの講演でランソンは、サント＝ブーヴ批評活動に何らかの的確さを与えていたのはその芸術家としての経験であったことを認めていた。「彼は作品の起源＝生成 *genèse* を理解した。作家たちの実験室 *laboratoires* の中に入り、頭脳の働きに立ち会うことができたのだ。」⁽³⁹⁾サント＝ブーヴ自身、そうした経験を切り札として語っている。「自らが芸術家的な部分を持っている場合、一時なりとも芸術家であったことがある場合、あるいは少なくとも芸術家になることをある程度望んだことがあった場合、生まれつつある創作 *créations naissantes* の監視は極みに達する」⁽⁴⁰⁾と批評家は述べていたのだった。「天分 *génie* の個性」「天賦の才が生まれつつあるとき *le don en naissant*」の「形成過程 *formation*」⁽⁴¹⁾という「文学批評の対象」に他ならないものを追求したことが、サント＝ブーヴをテヌヤルナンとは別格の存在にしていると、ブリュヌチエールも百周年講演で評価していた⁽⁴²⁾。

ところで、この天分の生成批評家に関心を持ったのは、作者の人間形成であった。

サント＝ブーヴが目指したのは「人の天分 *génie*, 教育, 状況がゆっくりと穏やかに巡り会い協調しあって最初の傑作が産み出された *enfanté* 瞬間において, その人間の全体を捉え理解し分析すること」⁽⁴³⁾である。〈作品〉を問題にする限り―〈テクスト〉ではなく―〈作者〉を扱おうとするのはある意味で自然なことであろう。「ゆえに, 作品をその誕生の場においてなぞり描こうではないか *Retraçons cette œuvre dans le milieu de sa naissance*」と, ブリュヌチエルはサント＝ブーヴに倣って, 我々に呼びかけていた。「そして, できればその起源＝生成 *genèse* を捉えよう。それは天から降ってくるものではない。自然発生的な創造 *génération spontanée* などないのだ。だから, 作品を, それが取り巻かれている状況との関係に置いてみよう。」⁽⁴⁴⁾

確かにサント＝ブーヴはマニュスクリや異文への関心をさかんに表明していたし(彼自身, 発表直前まで徹底的に原稿に手を入れる推敲の人であった), ルソーを論じた評論では, 出版されたばかりの「ヌーシャテル図書館所蔵のマニュスクリに拠る『告白』の冒頭部」を引用して見せてもいる⁽⁴⁵⁾。しかしながら, サント＝ブーヴ研究者がこぞって彼の代表的な「生成批評 *critique génétique*」のモデルとみなす『ウェルテル』論⁽⁴⁶⁾で専ら援用されているのは, 作家の書簡なのである。「ゲーテの書簡を読み, 『ウェルテル』を同時に読み直してみると, 真実であった部分と人の手で作り出された部分とを見分けることができる。」書簡は芸術作品の「構想や構成の軌跡 *traces du projet et de la composition* を明らかにする」ものであり, 生きられた要素が「解体され溶解されて」作品となっていくさまを「解きほぐす」助けとなる, とサント＝ブーヴは主張する。作家の回想録も同様だ。「構想計画の時期は混沌としていて不明瞭なものだが, 作家は後になってから, 注意深い観察者たる批評家としての優位さをもって, 回想録 *Mémoires* の中でそれに触れ, 構想が現れた瞬間を我々に表現してみせるのである。」⁽⁴⁷⁾天分の秘やかな法則は, 作品の中には微かに垣間見えるだけなので, パラテクストのうちに, あるいは作者の人生において捉えねばならない, というわけである。つまるところ, サント＝ブーヴの言う「生成 *genèse*」観察の方法とは, 彼の伝記的批評と表裏一体になったものなのだ。

ところで, その方法はサント＝ブーヴ自身によって作品化されていた――『ジョゼフ・ドルルムの人生・詩・思想』がその成果である。亡き友である詩人から原稿を遺贈された語り手＝刊行者は, 三部構成トリプティックの書の最初の章において次のように言明する。「詩だけで, それらが結びつけられている感情のいきさつが示されなければ,

半分しか理解されない謎にしかならなかったであろうから、我々はこの全く内的な生 *vie tout intérieure* の忠実な描写を綴ろうと努めたのだった。』⁽⁴⁸⁾ 詩作品の引用に続いて、語り手はさらに、詩人が「習慣として書きつけていた」美学的な「見解や指摘」をも収録し、作品の理解をいっそう容易にすることを図っているのである。

そもそもサント＝ブーヴが「存在 *existences*」の二つの様相を区別していたことを（プルーストに逆らって⁽⁴⁹⁾）ここで認めておかねばなるまい。すなわち生活に関わる存在と、創造に関わる存在とである。両相が互いに結び合う「重大な瞬間 *moment critique*」に、人は作家に変わり、人生が作品に変わるのだ。「すべてがそこで関係し合うことになるその結び目を解くならば、その神秘の環 *anneau mystérieux*、半ば鉄で出来ていて半ばはダイヤモンドで出来ている環、すなわち、光輝く眩しい荘厳な第二の存在を、薄暗く抑えつけられた孤独な第一の存在——その記憶を蕩尽しようと作家は何度も願うのだが——に結びつけるその環の鍵が見つかるならば、詩人を深く所有し、完全に知ることができる。詩人と共に闇の領域を渡りきることが出来るのである。」⁽⁵⁰⁾

作家の自己存在の二相をこうして想定した上でサント＝ブーヴは、天分の法則が顕示される瞬間と、そこに行き着く人生の諸相を、創造的磁場の動きとして転写することが批評の使命であると考え——生から作品への「神秘的な」変容を「再現する」ことが可能だと信じているのである。「人生におけるこのユニークな時期に、しばらく前から意識のうちに不安げに住みついていた天分 *génie* は夜明けを迎え、勝ち誇って開花する」。「伝記作家たる批評家 *critique biographe* は、手がける著者の人生のすべてと瞬間のすべてを手にして、犀利で洞察力のある分析により、芸術家が象徴 *symbole* のかたちで神のごとくに *divinement* 表現する *figurer* ものを、現実化 *réaliser* しなくてはならない。」「ひとたび型 *type* [神学で前兆、表徴を意味する；新約聖書の前触れとなる旧約聖書の人物や出来事；*figure*] が発見され表現されれば、批評家はそれをいくぶん変化させながら、詩人の人生の継起的な展開 *développements successifs* の中に、^フ ^リ ^ー ^ズ 带状浮彫装飾のごとく、再現する *reproduire* だけでよいのである。」⁽⁵¹⁾

批評が小説になるとき

人が作家となる「この重大な＝危機的な＝批評的な瞬間 *moment critique*」を明らかにすること、そして、天才の形成過程をたどり「再現する」こと。伝記的生成

批評家サント＝ブーヴの批評理念はまた、いわゆる「教養小説 Bildungsroman」の概念とも呼応するものではないか。ここで思い出しておきたいのは、サント＝ブーヴが『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』のフランスにおける初期の賛美者の一人であり、ゲーテの作品の形成過程を跡づけるために、『ゲーテとシラーの書簡集』のフランス語全訳が出るのを心待ちにしていたという事実である⁽⁵²⁾。

興味深いことに、1896年秋『ジャン・サントゥイユ』を執筆していた頃にプルーストが『ヴィルヘルム・マイスター』と合わせて読みたいと願ったのも、同じ書簡集であった⁽⁵³⁾。実際、伝記的生成批評家サント＝ブーヴの夢は、この時期のプルーストと分かちもたれていたように思われるのである。『ジャン・サントゥイユ』の序文草案でめざされていたのは「作家の人生とその作品との間に存在する秘かな関係とその変貌」を可視化し、そこから小説をつくりだすことであった。主人公ジャンが作家へと変容し、「ペンを取って自らの思考の早さを追いかける」姿、「あらゆる事物の奥底にまで精神が降りていってそれらを照らし出す、深い天啓のそうした瞬間」に我々は何度立ち会うことだろう⁽⁵⁴⁾！ プルーストが未完のまま放棄したこの最初の小説はまさしく、伝記的生成批評家サント＝ブーヴの気に入ったに違いない。言い換えれば、サント＝ブーヴに逆らって書かれるべき小説とは、生が作品になる瞬間も、そこに至る過程も、因果関係としては語り得ないものとなるだろう。創造の秘蹟は書かれない。この美学的判断を実践すべく、プルーストは、満を持して着手した小説『失われた時を求めて』から、主人公が作家（さらには作者）に変わる「臨界的瞬間 *moment critique*」を周到に消していったのだった（マルタンヴィルのエピソードを唯一の例外として）⁽⁵⁵⁾。

『ジャン・サントゥイユ』の放棄とサント＝ブーヴとの決別とは従って、ともに『失われた時を求めて』の誕生に不可避免的に結びついているのではなかろうか。“サント＝ブーヴに逆らって”書くことを企図するなかでこそ、最初の小説の失敗の深い意味をプルーストは捉えたのであり、自らの批評意識を“小説化する”必然的なかたちを新たに思い描くに至ったのではあるまいか。サント＝ブーヴを反駁する批評が小説に変容していったのは、反サント＝ブーヴ的な小説のかたちによって、サント＝ブーヴの伝記生成批評の読みを忌避し反駁するという、プルーストの意思表示だったのではないか。

じつのところ、小説という形式が、創造に行き着く人生を継起的に観察し記述するのに適したものであると考え、実践を試みたのは、ほかならぬサント＝ブーヴの弟子テーヌであった。サント＝ブーヴの方法の有効性を実証すべく書かれたかのよ

うな、テヌの未完の小説『エチエンヌ・メイラン』が、サント＝ブーヴとテヌの味方ブルジュによる解題付きで刊行されたのは1910年、まさに『サント＝ブーヴに逆らって』の構想が『失われた時を求めて』の構想へと決定的に変容した年のことである。以前に検証したこの一種の教養小説の破綻をめぐる問題をここで繰り返すことはしないが⁽⁵⁶⁾、この試作から学び得るものとは、“サント＝ブーヴに倣って”小説を書くことの不可能性の教訓、小説は“サント＝ブーヴに逆らって”しか書けない、さらに言えば、サント＝ブーヴへの批判は小説を書くことによってこそ完遂される、という確信であったであろうことを、ここで強調しておきたい。

「天職」の発見という小説の主題展開をプルーストが試行錯誤のうちにいかに軌道修正していったかについて、筆者はこれまでさまざまな機会に、『失われた時を求めて』の死後刊行部分の抱える諸問題との関わりから検証を重ねてきたのだが、それをサント＝ブーヴ批判の延長上で再検討することを、続く論考では試みたい。さらに、サント＝ブーヴの伝記的生成批評ヴィジョンの変奏とも言うべき“生成過程の作品化”の夢——そこから未だ醒めやらぬままに20世紀は終わったが——に翻弄される同時代文学と向き合いながら、プルーストが自らの小説美学の意義をいかに自覚していたかについても、具体的に考察を進める予定である。

註

1. Jean Bonnerot, *Un demi-siècle d'études sur Sainte-Beuve: 1904-1954*, 1957, pp. 42-43. 百周年記念式典については同書 p. 11, pp. 14-17 参照。ボヌロは1955年に文人協会から文学大賞を授与された多作な文筆家で、1907年には *La Revue idéaliste* (9-10月号) で、プルーストの『胡麻と百合』訳者序文の独創性を指摘していた。Cf. *Contre Sainte-Beuve*, La Pléiade, 1971 (以下 CSB と略す), p. 789.
2. *Le Livre d'Or de Sainte-Beuve*, aux Bureaux du Journal des Débats, 1904 (奥付の記載とは違って、実際の刊行は1905年6月). Gustave Michaut, *Sainte-Beuve avant les Lundis*, A. Fontemoing, 1904.
3. Jules Troubat, *La Salle-à-manger de Sainte-Beuve*, Mercure de France, 1910; *Sainte-Beuve*, conférence lue au Cercle Populaire d'Enseignement laïque, le 1er mai 1898, Imprimerie Modèle, 1898, p. 1, p. 31.
4. «Sur la lecture», *Renaissance latine* du 15 juin 1905; *Sésame et les Lys*, mai 1906; repris sous titre de «Journées de lecture» dans *Pastiches et Mélanges*, 1919; CSB, pp. 160-194. «Critique du roman de M. Gustave Flaubert sur l'«Affaire Lemoine» par Sainte-Beuve, dans son feuilleton du *Constitutionnel*», publié dans *Le Figaro* du 14 mars 1908 et repris tel quel dans *Pastiches et Mélanges*, 1919; CSB, pp. 16-21.

5. CSB, pp. 181-182 (傍点は引用者による). Léon Séché, *Sainte-Beuve*, t. I. *Son esprit, ses idées*; t. II. *Ses mœurs*, Mercure de France, 1904. 他にも *Le Sénacle de Joseph Delorme*, Mercure de France, 1911 や自らが創刊した *Annales Romantiques* 所収の多くのサント＝ブーヴ関連の論考あり。
6. 「ガゼット・デ・ボザール」次いで「デバ」紙の編集者を務めた André Chaumeix は、ブルーストが頻繁に書簡を交わした相手でもある。
7. «Discours de M. F. Brunetière à la cérémonie du Centenaire de Sainte-Beuve», *Le Livre d'Or de Sainte-Beuve*, 1904, pp. iii-xxi.
8. Jules Troubat, *Sainte-Beuve*, p. 1.
9. Gustave Lanson, «Avant-propos» *d'Hommes et Livres*, 1895.
10. Brunetière, *art. cit.*, pp. xvi-xvii, (傍点は引用者による)。
11. Antoine Compagnon, *Connaissiez-vous Brunetière?*, Seuil, 1997, p. 7, p. 115.
12. Hippolyte Taine, (1869), *Les derniers Essais de critique et d'histoire*, 3e édition revue et augmentée, Librairie Hachette et Cie, 1903, p. 96.
13. Lanson, *op. cit.*
14. 1909 年 8 月末のロベール・ドレフュス宛の書簡および 1912 年 10 月 26 日より少し前のストロース夫人宛書簡参照, *Corr.* IX, pp. 179-181; *Corr.* XI, p. 240.
15. André Beaunier, «Les devoirs de la critique», *Les Idées et les hommes*, 1913, pp. 19-20. ボーニエはさらに「批評は文学の自律性を明確に示すべきなのだ [...] その無秩序状態を糾弾し、その可能性と理想を編成すれば、文学の伝統的で国民的な義務を示すことになる」とも述べている。
16. Lettre de Flaubert à George Sand du 2 février 1869. Gustave Flaubert, *Correspondance*, t. 4, La Pléiade, 1998, p. 15.
17. «Proust 45», 13r°, 16-17r°; CSB, pp. 218-221.
18. Paul Bourget, hommage à la mémoire de Spoerberch de Lovenjoul, *Le Figaro* du 7 juillet 1907; repris au t. I des *Pages de critique et de doctrine*, 1912, pp. 294-296, ch. IX: «Charles de Spoelberch de Lovenjoul».
19. Hippolyte Taine, «Sainte-Beuve», article du 17 oct. 1869 et recueilli dans les *Derniers essais de critique et d'histoire* (1894), 3e éd. 1903, pp. 58-60. 興味深いことに、ここでブルーストが問題にしているテーヌの一節は、ちょうどトルーバが 1898 年の講演で引用した部分にそっくり相当する (*Sainte-Beuve*, pp. 27-28)。トルーバはそこで、サント＝ブーヴの「哲学」の一貫性の無さを批判する声に対して、「サント＝ブーヴが創りだした批評とは、単一で不変のシステムに閉じこもることができるものではない。彼はわざと手綱を可動な状態におき、新しい主題ごとにアプローチしていったのだ」と師を擁護している。その点、「一般化の人」テーヌが 1869 年の「見事な」追悼文のなかで、サント＝ブーヴには「完璧なシステム」がやはりあったのだと述べていることは「正しくない」というのがトルーバの主張である。「Proust 45」には、「前言撤回し続ける」サント＝ブーヴへの批判も展開されている (CSB, p. 229)。
20. *Grand Encyclopédie, inventaire raisonné des sciences, des lettres et des arts*, Société de

- savants et de gens de lettres, sous la direction de Berthelot et al., 1886-1902.
21. Jules Lemaitre, *Les Péchés de Sainte-Beuve*, Dorbon-ainé, 1913, pp. 9-11. ちなみに 1904 年のミショーの論文の後, 半世紀近く, フランスの文学部でサント＝ブーヴの博士論文が出ていないのも, 批評家への裁定がネガティブに傾いていたためなのであろうか (cf. Bonnerot, *op. cit.*, p. 14)。
 22. プレイヤード版『サント＝ブーヴに逆らって』(1971)の校訂者ピエール・クララックは, 「ブルーストの考えていた主題が, その時代にとっては, 大胆過ぎたことは明らかである」と述べ, サント＝ブーヴの支持者として一人だけ, フェルディナン・プールノンを挙げている (1905 年 1 月の *Revue universelle* で彼は「サント＝ブーヴは決定的に, 文学的議論の余地のない, 不朽の名声を得た」と述べていた)。CSB, pp. 821-822. 以来, 『サント＝ブーヴに逆らって』は新しかったのか否かという問いはブルースト研究界において検証されてこなかったと言ってよい。《La Question du *Contre Sainte-Beuve*》を特集として扱った *Bulletin d'informations proustiennes*, n°34, 2004 も, 同時代への言及は若干あるものの, ブルーストの論旨の革新性は疑われてはいない。マランツは Barbey d'Aurevilly, Lanson, Flaubert のサント＝ブーヴ批判があったことを指摘しているが, 同時代文学界の批判の動きを詳述することはなく, ブルーストがサント＝ブーヴの「方法」の批判者である以上に, 「サロン」描写の面でいかに彼の受容者であったかを論じている。Enid G. Maranz, «Encore du Sainte-Beuve: Proust, Sainte-Beuve et les salons», *Marcel Proust 3*, Minard, 2001, pp. 63-74.
 23. Georges Grappe, *Dans le jardin de Sainte-Beuve. Essai*, Stock, 1908. Albert Sorel, «I. Années d'apprentissage», 17 déc. 1904; «II. Les Portraits», 24 déc. 1904; «III et IV. Les Lundis et Port-Royal», 7 et 14 jan. 1905, *La Revue bleue*.
 24. «Sur la lecture» en 1905, CSB, p. 172.
 25. Lettre à Paul Souday, 10 nov. 1919, *Corr.* XVIII, p. 463. Cf. Lettre à Daniel Halévy du 19 juillet 1919, *Corr.* XVIII, pp. 334-336. «Pour un parti de l'Intelligence» の題で 1919 年 7 月 19 日の「フィガロ」紙文芸付録の第 1 面に掲載された宣言書には Paul Bourget, André Beaunier (かつてのサント＝ブーヴ批判者), Daniel Halévy, Henri Ghéon, Edmond Jaloux, Charles Maurras, Henri Massis, Jean-Louis Vaudoyer, Jacques Bainville らが署名していた。
 26. Fernand Vandérem (Vanderheym), Chronique «Les lettres et la Vie», *Revue de Paris*, 15 oct. 1919, pp. 848-865.
 27. Daniel Halévy, «La Mémoire de Sainte-Beuve, 13 oct. 1869-13 oct. 1919», *Journal des Débats* du 13 oct. 1919, p. 1; «À propos de Sainte-Beuve critique», *Minerve française*, t. IV, fév. 1920, pp. 219-296.
 28. *Corr.* XVIII, p. 335.
 29. CSB, p. 596: 「ダニエル・アレヴィ氏は最近『デバ』紙上にサント＝ブーヴ百周年 [sic. 没後 50 周年] についての見事な論考を書いた。しかし私の意見では, 我々が失った最も偉大な導き手の一人としてサント＝ブーヴを挙げようとするとは, 氏はよほどその日, 着想が乱れていたに相違ない。」
 30. CSB, pp. 570-586. 註 4 も参照。

31. *Le Temps* du 31 oct. 1919, p. 3. Lettre à Paul Souday, 10 nov. 1918; *Corr.* XVIII, pp. 462-465.
32. Lettres de J. Rivière du 22 fév. 1920, *Corr.* XIX, p. 129; du 2 mars 1920, *Ibid.*, p. 140; du 28 avril 1920, *Ibid.*, p. 247. リヴィエールは『月曜閑談』をプルーストの下に届けさせてもいる。プルーストの返答としては lettres du 22 fév. 1920, *Corr.* XIX, p. 137; de peu après le 20 mai 1920, *Ibid.*, pp. 277-278 を参照。拒否の理由の一つとしてタディエは、1909 年のノート（サント＝ブーヴ反論のための）を渡したくなかったからであろうと述べているが（Jean-Yves Tadié, *Marcel Proust*, p. 852），むしろそれを発展させたかたちで公にすることを控えるつもりはプルーストにはなかったと思われる。
33. «À propos de Baudelaire», NRF, juin 1921; CSB, p. 631. プルーストが言及しているのは Fernand Vandérem (Vanderheym), «Sainte-Beuve et Baudelaire», *Les Temps modernes*, février-mars 1914. この批評家とプルーストの間には何通もの書簡が交わされている。1919 年 7 月 15 日の「パリ評論」でヴァンデレムが（手紙での対応とは打って変わって）『スワン家の方へ』を酷評したことにプルーストは憤っていた（lettre à F. Vandérem, 15 janv. 1920, *Corr.* XIX, pp. 68-70; cf. *Corr.* XVIII, p. 331 et p. 420）
34. «À propos du “style” de Flaubert», NRF, janvier 1920; CSB, pp. 586-600. Cf. A. Thibaudet, «Amis et Ennemis de Sainte-Beuve», NRF, août 1926, pp. 223-232.
35. プルーストはこの言葉を一連の「模作」制作の動機を語る際に用いていた。Cf. Lettre à Robert Dreyfus du 17 mars 1908, *Corr.* VIII, p. 61: «C’était par paresse de faire de la critique littéraire, amusement de faire la critique littéraire “en action”».
36. Lettre à Georges de Lauris, vers la mi-décembre 1908: «un article que je veux faire sur Sainte-Beuve», *op. cit.*, p. 320. Lettre à Mme de Noailles, vers la mi-décembre: «une étude sur Sainte-Beuve», *loc. cit.*
37. Henri Bonnet, «Étude critique du “Contre Sainte-Beuve”», *Alphonse Darlu*, 1961, p. 113, p. 111. 註 22 も参照。
38. Bonnerot, *op. cit.*, p. 147. CSB, p. 190.
39. Lanson, La conférence du 18 décembre 1904 à Liège. 講演テキストは *La Revue de Belgique*, t. XIX, numéro spécial du 15 janvier 1905, pp. 5-28 に所収（*La Revue universitaire*, 1905, pp. 119-132 に抜粋掲載）。
40. Sainte-Beuve, «M. A. de Musset», *Revue des Deux Mondes*, 15 janvier 1833; texte repris dans *Portraits contemporains*.
41. Sainte-Beuve, «Histoire de la littérature anglaise par M. Taine», *Le Constitutionnel*, 30 mai, 6 et 13 juin 1864; *Nouveaux Lundis*, t. VIII; *Pour la Critique*, 1992, p. 180, p. 178. «Histoire de la vie et des ouvrages de Pierre Corneille de Jules Taschereau», *La Globe*, 12 août 1829 et 12 sep. 1829; *Portraits littéraires*, t. I, sous le titre «Pierre Corneille»; *Pour la Critique*, p. 117.
42. Brunetière, *Le Livre d’Or de Sainte-Beuve*, pp. xv-xvii.
43. Sainte-Beuve, «Pierre Corneille», *Pour la Critique*, pp. 117-118.
44. Brunetière, *Le Livre d’Or de Sainte-Beuve*, p. xii.
45. Sainte-Beuve, «Les Confessions de J.-J. Rousseau», *Le Constitutionnel*, 4 nov. 1850;

Panorama de la littérature française, Livre de Poche, 2004, p. 933. Cf. la version publiée dans la *Revue suisse* d'oct. 1850;

46. Pierre Moreau, *La Critique selon Sainte-Beuve*, 1964, p. 124.
47. Sainte-Beuve, *Nouveaux Lundis*, t. XI, pp. 289-291.
48. Sainte-Beuve, *Vie, poésies et pensées de Joseph Delorme*, (1829), éd. de Bartillat, 2004, p. 39, p. 189.
49. Cf. *CSB*, p. 221: «cette méthode [de Sainte-Beuve] méconnaît... qu'un livre est le produit d'un autre moi que celui que nous manifestons dans nos habitudes, dans la société,... Ce moi-là, si nous voulons essayer de le comprendre, c'est au fond de nous-même, en essayant de le recréer en nous, que nous pouvons y parvenir». この2つの自我をブルーストは「le moi qui produit les œuvres」と「[le] moi extérieur」p. 222, «[le] moi profond」と「un soi bien plus extérieur」p. 224 とも言い換える。
50. Sainte-Beuve, «Pierre Corneille», *Ibid.*, p. 118.
51. *Ibid.*, pp. 118-119.
52. 拙論「マルセル・ブルーストの修業時代」『一橋大学研究年報 人文科学研究』43, 2006年, pp. 204-208 参照。Sainte-Beuve, «*Les Conversations de Goethe avec Eckermann*», 14 oct. 1862; *Nouveaux Lundis*, III, pp. 264-329.
53. *Corr.* II, p. 124, lettre à sa mère du 16 sep. 1896; p. 144, lettre du 22 oct. 1896.
54. *Jean Santeuil*, La Pléiade, 1971, p. 190, p. 188, p. 194.
55. 拙論「『ジャン・サントゥイユ』から『失われた時を求めて』へ——書けない主人公の誕生」『一橋大学研究年報 人文科学研究』37, 1999年, pp. 53-107 参照。
56. 前掲拙論「マルセル・ブルーストの修業時代」参照。